ネットと文明

第4部
常識オセロ ❷

暗号は猫の顔

デジタルを人間くさく

婦、永井とも子（54）は額に汗が浮かんだ。大好きな歌舞伎の公演。ネットで予約しようにも必要な暗証番号が思い出せない。結局、当日券を求め早朝から劇場に並んだ。

ネットを利用したサービスは早くて便利。だが不正利用を避けるには複数のパスワードを使い分けるサービスに加入した。金庫の鍵は身近な記憶。携帯電話画面に出る三十六枚の写真から飼い猫など事前に指定した画像を選ぶと必要なパスワードが表示される仕組みだ。

開発したのは大阪市のベンチャー企業、ニーモニックセキュリティ。社長の国米仁（59）は「身近な記憶の組み合わせだから高齢者にも簡単」と胸を張る。ネットに不慣れな層に合わせIT（情報技術）も進化。「ネットは面倒」「怖い」といった常識を覆す。

「パスワードは間もなく不要になる」。二月、米マイクロソフト会長のビル・ゲイツ（50）は講演で力を込めた。来年初にも発売する基本ソフト「ウィンドウズ・ビスタ」には、新しい個人認証技術を搭載。複数のパスワードを扱う煩わしさから解放が近づく。

パソコン保有は全世帯の七八％、ネット利用者は国民の六割を超す。身近な生活にもデジタル技術が浸透し、〝IT弱者〟も豊かさという文明の条件を視野に入れ始める。

無機質になりがちなネット社会も人くさいアナログ感のあるデジタル技術が和ませる。都内の税理士、佐藤仁（43）は「手書きにしたいが大量の書類となると厳しい」と手書き文字をパソコンで使えるソフトを購入。顧客への報告状などに使う。

ソフトを提供する神戸市のテクノアドバンスは利用者の筆跡の特徴を分析しそっくりな字体を作る。「これからはデジタルとアナログ融合の時代」と社長の片岡正（50）。発売から三年で注文は一万件に及ぶ。

機械も誘導迷う

新たな技術に頼るうちに錯覚にも陥る。「カーナビのせいで夕食に間に合わなかった」。大阪市の旅行会社ホワイト・ペアーファミリー社長、近藤康生（50）は「最近こんな苦情が多い」とぼやく。

レンタカーを使ったツアー参加者でカーナビゲーションへの過剰な信頼が苦情の原因。自分で地図を見て迷えば割り切れるが、誘導してくれる機器に完全を求め責任を問いたくなる。ネットなど技術進化は利用者を助ける半面、使いこなすより依存する消費者も生む。

電話開通の十年後。新聞に掲載された「二十世紀の予言」は東京に居ながら「無線電話」で海外の友人と自由に対話できると、今では当然の夢を掲げた。紙、印刷技術、鉄道と様々な発明が「不便は仕方ない」という常識を裏切ってくれた。

新しい技術は歓迎と敬遠との間をたどりつつ、豊かさの享受が一気に広がると文明への道が開ける。ネット社会はまだその入り口にあるのかもしれない。

＝敬称略

（ネットと文明取材班）

情報や体験、意見を電子メール（netciv@nex.nikkei.co.jp）か郵便でお寄せください。

パスワード代わりに画像を選択する

新文明の予兆

- 世代や地域に情報格差が発生。いったんは経済格差の影
- 技術革新の加速で差を平準化。豊かさ生まれ文明の芽
- 技術を使いこなせず、依存が続けば文明にはほど遠く

「こんなに素早く伝わるなら、コレラも電話を通じて伝染するに違いない」。百十六年前、東京―横浜間で電話が開通した当時。東京で流行中のコレラが横浜でうつると本気で恐れられたという。

情報格差の谷間

未知なる技術は時に人をおののかせ、取り残され不安も抱かせる。インターネットを敬遠し、デジタルデバイド（情報格差）の谷間にとどまるか、いっそ技術の方を自分に近づけさせるか。

「あれ、なんだったっけ」。兵庫県西宮市の主記をあきらめ、ネット上の〝金庫〟に情報をしまえないと危険だ。「そんなの分かってるけど」

永井はパスワードの暗